

青年期における女性の役割観の 変容について¹⁾

稲垣知子

I 問 題

戦後、日本においてもっとも大きく変化したものの一つは、女性の社会における地位、役割の変化であったといわれる。その変化した女性の役割は、男性及び女性によって一体どのように認知され受容されているのであろうか。最近問題になっている女性の社会的適応と自己実現を検討するために女性の役割観の解明は是非とも必要と考えられる。

女性の役割についての実証的研究は、Komarovsky, M. (1946)²⁾に端を発したといえる。

Komarovsky は女子大学生の社会的環境における矛盾した二つの役割、すなわち女性的役割 (feminine role) と現代的役割 (modern role) の存在を指摘し、その後、この女性の役割の体系的実証的研究のために機能分析的アプローチの必要性を説いた (1950)³⁾。Wallin, P (1950)⁴⁾ は Komarovsky の研究がサンプリングと調査の手続きに問題があることに気づき、それらを改良して追試し、本質的に Komarovsky の研究結果が正しいことを立証した。これらの研究は女性のみを対象にしてただ事実の調査を行なっただけにとどまっている。それに対し、McKee, J. P. & Sherriffs, A. C. (1957)⁵⁾ は、男女大学生を対象にし、それまでの性差を取り扱ったごく少数の研究が単に男性の優位を受け入れるだけで根本的な問題への解決がなされていないことを指摘し、男女の評価の相違について研究した。その結果、男女とも女性より男性を高く評価することが判明した。そこで、男女大学生が自己と他者とを記述する特性について質的な研究をし、男子が知的合理的であり環境に対して大胆であるのに比べて、女子は情緒的暖かさとか不合理な好ましくない情緒性を示すと結論を下した (1957)⁶⁾。それに続いて、200語の形容詞チェックリスト

1) 本研究は1967年京大教育学部へ提出した修士論文の資料の一部を再分析し、加筆したものである。

2) Komarovsky, M. 1946, Cultural contradictions and sex roles. *Amer. J. Sociol.*, 52, 184-189.

3) Komarovsky, M., 1950, Functional analysis of sex roles. *Amer. Sociol. Rev.*, 15, 508-516.

4) Wallin, P., 1950, Cultural contradictions and sex role: a repeat study. *Amer. Sociol. Rev.*, 15, 288-293.

5) McKee, J. P. & Sherriffs, A. C., 1957, The differential evaluation of males and females. *J. Pers.*, 25, 356-371.

6) Sherriffs, A. C., & McKee, J. P., 1957, Qualitative aspects of beliefs about men and woman. *J. Pers.*, 25, 451-464.

によって男女の役割についての变化と緊張とが、信念と態度に反映することを示した(1959)⁷⁾。McKee らの研究から、男女の間には評価に相違が見られ、それには役割が影響を及ぼしていることが明らかになった。大宮(1956)⁸⁾も男女の差異は身体的、生理的要因が作用したという以外に、ある社会が男女の両性に異なった地位と役割とを与えることによって形成されてきたと指摘している。Hamburg, D. A. & Lunde, D. T. (1966)⁹⁾の展望から明らかなように、パーソナリティとその行動特徴における男女間の差異は、発生学的・分泌学的な面からのみ見れば全人類に共通な特徴がある。しかしその生物学的レベルの差異に対する心理的な反応の仕方は文化や社会によって決定されるものであるといえよう。例えば、Mead, M. (1949)¹⁰⁾はニューギニアのムンドグモ族、チャンブリ族等7種族について詳しい現地調査を行なった。彼女の観察結果によれば、ムンドグモ族では女たちが男たちに劣らず強じんであり、育児をひどくきらい、食糧はたいてい女が供給するので、男たちは自由に戦ったり陰謀したりしてくらしている。またチャンブリ族では女たちは活発で事務能力があり魚を釣るなど生活資源の獲得と生活に関する仕事のほとんどをするので、男性はけばけばしく着飾り、儀礼的役割と補助的役割に携わるだけであるという。このように、われわれの社会と逆の男女のパターンが形成されていることは、文化により性役割が決定されることの裏付けといえよう。Steinmann, A. は、女性の社会的役割についての、多くの対象について広範囲な国々に及ぶ注目すべき一連の研究を進め、男女の性役割の理想と現実についての研究をまとめた結果をAPAの総会で報告した(1966)¹¹⁾。Steinmannは「種々の背景、職業的地位、生活状況、年齢、更に異なった国の女性がそれらの相違にもかかわらず、女性の役割と行動について特別の価値を共有するであろう」という仮説に基づいて、米、英、仏、日等8ヵ国について調査し、これらの文化では「種々の違いにもかかわらず二つの矛盾する役割観を共有している」という結果を見出し、仮説は支持された。日本においても稲垣(1965,¹²⁾ 1967¹³⁾、滝本(1965)¹⁴⁾はSteinmannと共同して日本の男女大学生のもつ女性の役割観について研究し「女性の役割観には他者指向的な役割観と自己指向的役割観という二つの相いれないものがあり、しかも現実像と理想像に差異がある」との結果をえた。

7) McKee, J. P. & Sherriffs, A. C., 1959, Men's & women's beliefs, ideals and self concept. *Amer. J. Sociol.*, 64, 356-363.

8) 大宮録郎, 1956, 地域における男女差. 青年心理, 7, 252-256.

9) Hamburg, D. A. & Lunde, D. T., 1966, Sex hormones in the development of sex differences in human behavior. In Maccoby, E. E. (ed.), *The development of sex differences*, California: Stanford Univ. Press, Pp. 1-24.

10) Mead, M., 1949, *Male and Female: A study of the sexes in a changing world*. (田中寿美子・加藤秀俊訳, 男性と女性. 上下 東京創元新社 1961)

11) Steinmann, A. & Fox, D. J., 1966, Self and ideal sex-role perception of men and women and their ideal perception of each other. Paper readed at APA Convention: Symposium.

12) 稲垣知子 1965, 日本における女性の役割観についての心理学的分析. 京大教育学部卒業論文。

13) Inagaki, T., 1967, A cross-cultural study of the feminine role concept between Japanese and American college women. *Psychologia*, 10, 144-154.

14) 滝本和子 1965, 日本の男女大学生の米国女性観に関する心理学的研究 京大教育学部卒業論文。

以上概観した女性の役割についての研究から、①女性の役割は文化・社会から強い影響を受けて規定されているものであり、その考え方には二つの矛盾した型がある。②自己意識の現実と理想とは大きな差異がある。という事実が判明した。この矛盾した二つの役割観の存在、あるいは現実と理想との差異は何を意味するのであろうか。現在までの研究は単に現象的事実の指摘のみに留まり、何らの解釈もなされていないといえる。さらにこれまで概観した研究は、1, 2 のものを除いてすべてが大学生を対象にした研究であることから、前述の事実は一般に敷衍しうる現象なのか、それとも大学生という特定の年齢段階に独自の現象なのかという疑問も生じる。

従来の自我心理学の研究では、自己意識の現実と理想との差異は不適応の指標であるといわれてきた¹⁵⁾。しかし、Bills, R. E. (1953)¹⁶⁾, Roberts, G. E. (1952)¹⁷⁾, Cowen, E. L. (1954)¹⁸⁾らがこの仮定に対して肯定的な結果を出したのに対し、Zimmer, H. (1954)¹⁹⁾は否定的な結果を示すというように、必ずしもこの仮設が支持されているとはいえない。長島 (1962)²⁰⁾はこれらの研究を展望して、role theory などと問題とされる自我と他我の関係が問題としてクローズアップされていないことに気づき、自我と他我との差異が適応指標としての有効性と、従来の差異スコアの有効性を検証する研究を展開し、現実と理想との差は一義的な適応の標識となりえないことを実証した。これは Chodorkoff, B. (1954)²¹⁾の適応と自己意識の現実と理想の差との関係は曲線的であるという結果を支持しうるものといえる。加藤 (1961)²²⁾, Wylie (1961)²³⁾のすぐれた review から明らかなように、正常人の示す現実と理想の自己意識の差が、即不適応の指標であると断定することは、現状では不可能である。自己意識は身体状態の変化、社会学習、精神発達、あるいは自己同一視の発達とともに形成されていくといわれている (Allport, G. W., 1961)²⁴⁾。それ故に、自己意識と適応との関係をとらえるには、まず自己意識の現実と理想との差異は、成長につれてどのように変化するかをとらえ、各年齢段階での正常の基準を決めることが必要であるといえよう。

以上から、筆者は現段階では女性の役割観の研究で示された理想と現実との差異が、一義的に

15) この説は、Rogers, C., あるいは Snygg & Comb (1949) の現象心理学的知見に基づいて、Bills, Vance & McLean (1951) が Index of Adjustment and Values を作成したのが、自己意識の分析から適応を研究した最初といえる。

16) Bills, R. E., 1953, A validation of changes in scores on the index of adjustment and values as measures of changes in emotionality. *J. consult. Psychol.*, 17, 135-138.

17) Roberts, G. E., 1952, A study of validity of the index of adjustment and values. *J. consult. Psychol.*, 16, 302-304.

18) Cowen, E. L., 1954, The "negative-self-concept" as a personality measure. *J. consult. Psychol.*, 18, 138-142.

19) Zimmer, H., 1954, Self acceptance and its relation to conflict. *J. consult. Psychol.*, 18, 6, 447-449.

20) 長島貞夫 1961, 操作的方法による自我の心理学的研究。野間教育研究所紀要第21集, 講談社。

21) Chodorkoff, B., 1954, Adjustment and the discrepancy between the perceived and ideal self. *J. clin. Psychol.*, 10, 266-268.

22) 加藤隆勝 1961, 自己意識の分析による適応の研究。心評, 31, 53-63。

23) Wylie, R. C., 1961, *The Self Concept*. Lincoln; Nebr. Univ. Nebraska Press.

24) Allport, G. W., 1961, *Pattern and growth in personality*. New York; Holt,

社会的不適応をあらわしていると解釈することは早急に過ぎると考える。

発達の見地からいうと、大学生は青年期中期あるいは後期に属している。真に自己を他者と区別して認知し、自己に対する意識が生じるのは青年期の初めであり、自己意識の形成を青年期最大の特徴の一つであるとするのは、人格心理学、青年心理学で一般に認められている事実である。すなわち、Allport²⁵⁾は青年期の主特徴は「self identity への再探索」であるという。Spranger, E. (1926)²⁶⁾も青年期の心的特徴の一つとして、自我の発見をあげた。沢田 (1966)²⁷⁾は身体の急速な成長と性的成熟、思考の発達、独立の要求と仲間関係とともに、自我の自覚と発展を青年期の特徴とする。この自己意識あるいは自我像は、個人の発達過程の中で、生理・身体的要因と社会的要因との交互作用を通して発現するといわれる (花沢 1959)²⁸⁾。自己意識とともにあげられる青年期の主特徴に、生理的バランスの急激な変化、性的成熟がある。すなわち、骨格・歯牙、顔つきに至るまで急激な変化があり、第二次性徴があらわれ成人へ近づく。それに伴い、知的にも情緒的にも発達し、社会的行動や態度でも顕著な変化がみられる²⁹⁾。

性役割の意識は、青年期に至るまでの段階で Bandura, A. & Walters, R. (1963)³⁰⁾ のいう如く、同一視を通して、あるいは観察学習を通して性役割行動として獲得されていたものが、自己意識と社会化、あるいは生理身体的成熟の相互作用によって内面化され、形成されていくものと推定される。しかし、青年期の性役割の意識についての実証的研究は、柏木 (1967)³¹⁾の性役割の認知についての研究がなされている程度であり、現状では青年期の自己意識の標準を定め、そこから適応を云々することは不可能である。それ故に、先ず解明すべきは、青年期の性役割の意識が年齢とともにどのように変化するかという問題である。

II 目 的

本研究は、青年期における女性の役割観が年齢とともにどのように変わっていくかについて分析検討することを目的とする。なお、研究の前提として、これまでの研究から実証されている女性の役割に対する二つの矛盾する考え方を受け入れ、自己指向的役割観と他者指向的役割観と呼ぶことにする。この矛盾する二つの役割についての名称は研究者により異なっているが、筆者は従来通り、「他者指向的」と「自己指向的」という表現を用いる。すなわち、自己の役割観が自我

25) 前出 pp. 121～127.

26) Spranger, E., 1928, *Psychologie des Jugendalters*. Quelle & Meyer. 10te Aufl. s. 38-40. (土井竹治訳, 1937 青年の心理 刀江書院 Pp. 57-59). 沢田慶輔 (編) 青年心理学より引用。

27) 沢田慶輔編 1966, 青年心理学, 東京大学出版会。

28) 花沢成一 1959, 青年期における理想的自我像(2)試案質問紙による一考察, 日本心理学会第23回大会発表論文集, 分冊D, 北海道大学。

29) 沢田慶輔編, 青年心理学を中心に, 依田新, 青年心理学, 坂田一その他の青年の心理と適応, 野辺地正之, 青年の自我と人格を参考にして, 要約したものである。

30) Bandura, A., & Walters, R. H., 1963, *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

31) 柏木恵子 1967, 青年期における性役割の認知. 教心研., 15, 193-202。

と他者とのかわりあいにおいて形成されるものであることを考える時、二つの矛盾した女性の役割は、他者により重きをおくか、自己に重点をおくかということの相違になると考えられる。

実際には、他者指向的な女性とは、人生において自分を夫や子供の付随者と考え、夫や子供の成功を助長することによって自己の達成を間接的に計るように行動する女性を意味し、自己指向的な女性とは、自分自身の潜在的な可能性を現実化することにより、直接的に自己の達成をめざして努力する女性である。

III 方 法

一般的に発達的な研究への接近法には、縦断的方法と横断的方法がある。有効な資料を得るには、一定人数の対象を年齢発達をいながら一定期間追跡的に研究する縦断的方法を用いる方が横断的方法より望ましいといえるが、時間が非常に長くかかり、しかもデータを多く集めることは困難である。そこで本研究では、各年齢段階毎に多数の被験者について同時に調査することができる横断的方法により資料を集めた。横断的アプローチにより青年期をとらえる場合、青年期を幾段階かに区切ることが必要である。青年期の区分は大体、前、中、後の三期に分けられるが、何歳から何歳までにするかについては学者により一致した見解はない。筆者は青年期の区分について、その境界を明瞭に画することはできないが、生理身体的な成熟、自己意識、自主性の発達あるいは現在の教育制度などを鑑み、青年前期 (11・2才～15・6才)、中期 (15・6才～18・9才)、後期 (18・9才～22・3才) とするのが妥当と考える。以上より、本研究の目的を検討するための具体的問題として、次の3点を定める。

1. 青年期のそれぞれの段階における男女のもつ女性の役割観の全体的な様相はどのようなものであるか。
2. 青年期3段階を通して、女性の役割観はどのように変化するか。
3. 1, 2において、男女間に女性の役割についての考え方にどのような相違がみられるか。

調査用紙について 本研究に使用した調査用紙は、Fand, A. B. (1955)³²⁾ によって作られた *Feminine Role Rating Inventory* を日本語に訳したものである。*Inventory* は一系列34項目からなり、他者指向的な質問項目17と自己指向的な質問項目17が交互に配してあり、5点尺度法により評定するようになっている。日本語訳については、1964年³³⁾ の資料を検討した結果、日米間では家庭、社会についての考え方に相違があり、そのままでは日本の実状に適さないと思われる表現の含まれていることが判った。そこで内容を変えないで、理解し易くしかも調査用紙の目的に合致するように日本語訳の改訂をした。調査用紙は Form I「現実の自己の役割観」、Form II

32) Fand, A. B., 1955, Sex role and self concept. Unpublished Ph D. thesis. Cornell Univ., (Steinmann, A., 1963, A study of the concept of the feminine role of 51 middle class American families. *Gen. Psychol. Monog.*, 67, 275-352 より引用)

33) 稲垣知子 前出論文参照。

「理想の自己の役割観」, Form III「異性の理想の女性観についての予測」の3形式からなり、3 Form の項目は教示と項目配列順序が違っただけで、内容は同じものである。

女性の役割に対する個々人の態度が他者指向的な役割観の極端から自己指向的な役割観の極端までの連続体上のどこに位置づけられるかを示す指標として O-S score と呼ばれる尺度を定めた。具体的には、O-S score を他者指向的質問項目の総和から自己指向的質問項目の総和を減じた数と定義する。

本研究においては、16歳以上の対象には調査用紙をそのまま使用したが、12, 3歳の被験者では用語がむずかしくて理解できない箇所があることが予備調査から明らかになった。そこでなるべく意味は同じで表現をやさしくするよう改め低学年用の用紙を作り、それを用いた。

調査用紙の信頼性と妥当性について 各調査用紙の信頼度係数を折半法により算出した結果、

第1表 因子負荷量 (varimax 回転をした後のもの)

項 目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	h ²
1	0.537	0.172	0.227	-0.217	-0.072	0.109	-0.225	0.168	0.527
2	-0.559	0.195	0.195	0.138	-0.075	0.315	-0.012	0.096	0.521
3	0.165	-0.005	-0.041	0.771	-0.043	-0.042	-0.028	0.006	0.627
4	0.282	0.297	-0.124	0.036	0.525	-0.407	-0.240	-0.126	0.700
5	0.050	0.286	0.232	-0.002	0.025	0.199	0.539	-0.121	0.484
6	0.626	0.172	-0.037	0.135	-0.101	-0.006	-0.038	-0.057	0.455
7	0.599	-0.057	0.171	-0.046	0.135	0.138	0.173	0.149	0.483
8	0.142	-0.201	0.035	0.024	0.017	0.003	0.599	0.105	0.433
9	0.244	0.086	0.416	0.093	-0.463	-0.158	0.014	-0.031	0.489
10	0.172	0.078	-0.077	0.069	0.071	-0.337	0.209	-0.037	0.210
11	-0.103	0.029	0.076	0.042	0.170	-0.394	-0.217	0.028	0.251
12	0.053	-0.152	0.381	-0.280	-0.325	-0.184	0.624	-0.129	0.794
13	0.147	0.408	0.295	0.072	0.165	0.151	-0.126	0.557	0.657
14	-0.266	-0.036	0.157	-0.008	0.153	-0.480	-0.041	-0.054	0.355
15	0.348	0.699	-0.177	-0.128	-0.001	-0.020	-0.060	-0.145	0.683
16	0.064	-0.576	0.227	-0.168	0.147	0.052	0.076	-0.025	0.447
17	0.156	-0.007	0.672	0.039	0.241	0.084	-0.150	0.216	0.611
18	0.135	-0.048	0.271	0.087	0.401	0.322	0.273	0.227	0.492
19	0.061	0.242	0.521	-0.254	-0.148	-0.174	0.252	-0.086	0.522
20	-0.104	0.323	0.395	0.624	0.082	0.178	0.039	-0.061	0.705
21	-0.043	0.693	0.246	-0.072	0.088	-0.030	-0.126	0.188	0.607
22	-0.008	-0.212	0.666	-0.174	0.085	0.077	0.028	0.244	0.592
23	0.295	0.300	0.420	-0.014	0.289	0.249	-0.066	-0.536	0.771
24	0.201	-0.125	0.420	-0.299	-0.059	0.091	-0.169	-0.331	0.471
25	0.074	0.157	0.383	0.118	-0.007	-0.290	-0.014	0.503	0.528
26	0.098	-0.118	-0.005	0.025	-0.027	0.581	-0.083	-0.035	0.370
27	0.193	0.277	0.704	0.080	0.182	0.121	-0.088	-0.052	0.674
28	0.565	-0.446	-0.022	0.195	-0.023	0.066	0.110	-0.184	0.608
29	-0.250	0.342	0.011	-0.062	0.774	0.153	0.100	0.152	0.839
30	-0.147	0.065	0.068	-0.071	0.558	-0.105	-0.021	-0.078	0.365
31	0.100	-0.064	0.394	0.303	0.078	-0.182	0.075	-0.019	0.307
32	-0.053	0.071	0.576	-0.072	-0.164	0.006	0.088	-0.169	0.408
33	0.319	0.223	0.452	0.375	-0.176	0.047	-0.019	0.096	0.539
34	-0.137	0.614	0.123	0.058	0.048	0.037	0.220	-0.164	0.494
x ²	3.084	3.526	4.508	2.422	2.587	2.138	2.106	1.877	18.019
100x ² /34	9.07	10.37	13.26	7.12	7.61	6.29	6.19	5.52	52.95

Form I では .82, IIでは .86, IIIでは .85であり, 米国の原典の .81と同じ程度であった。また O-S score に対する各項目の評定点の相関をもとめたところ, 2, 3の項目を除いて有意な相関が見られた。以上より調査用紙の信頼性はかなり高いといえる。

妥当性を検討するため大学女子の Form I について, 4分相関を求め, 完全セントロイド法により因子分析を行ない, varimax rotation をした結果が, 第1表に示してある³⁴⁾。

因子は8箇抽出され, ほぼ単純構造となり, 34項目はほとんど完全に独立してどれかの因子に属している。これらの8因子は次の如く命名することができる。第I因子は「女性の自己実現に関する因子」である。第II因子は, 「他人特に夫との関係についての因子」, 第III因子は「家庭における夫婦の役割態度についての因子」, 第IV因子は「母子関係の因子」といえよう。また第V因子は「自己の人生における価値態度をあらわす因子」といえ, 第VI因子は, 「他者に対する積極的働きかけについての因子」第VII因子は「一般的他者への依存性をあらわす因子」³⁵⁾, 第VIII因子は「人生の目標を受動的援助とすることについての因子」と呼ばれる。Fand は項目内容として, 一般に男性, 子供あるいは社会との関係における女性の要求, 権利, 義務についての考え方を取りいれるように意図して構成した。Fand の仮定した役割観の内容は, 明らかに因子として抽出されており, 同時に各因子には本研究で前提とした自己指向的と他者指向的なものが万遍に分けられている。従って, 調査用紙の本質的妥当性および表面的妥当性は保証されている。

調査対象 前述の青年期区分に従い, 大
体各段階の中心と見なしうる年齢層に対象
を設定した。その上, 中学・高校生は入試
準備などの偏奇の考慮から一番適当と思わ
れる2年生に限定した。大学生はすべて教
養コースの心理学受講の学生である。実際
上の問題から京都市内の学校に限らざるを
えなかったが, 各年齢層なるべく学校の特
色, 社会的背景の偏りをなくするように広
い地域から, 中学・高校・大学とも数校抽
出した。しかし, なお高校生, 大学生が選
択集団であるのに対し, 中学生が義務教育
であること, あるいは中学, 高校生が全員
自宅通学であるのに対して大学生は諸県か
らの集合体であるなど統制しえぬ問題は残
されている。青年期の役割観の変容を明確

第2表 調査対象について

学 校	男子総数 (有効数)	女子総数 (有効数)
A(大学)	102 (95)	18 (17)
B	77 (75)	91 (87)
C	49 (43)	126 (115)
D		56 (53)
合 計	228 (213)	291 (274)
E(高校)	48 (33)	50 (47)
F	63 (59)	38 (37)
G	74 (68)	22 (21)
H		44 (38)
合 計	185 (160)	154 (143)
I(中学)	43 (36)	46 (39)
J	42 (35)	45 (40)
K	43 (40)	57 (48)
L		104 (68)
合 計	128 (111)	252 (195)
一般婦人		120 (88)

34) 京大, HITAC 電子計算機を使用。

35) Fand, A. B. (1955) 前出。

にするには青年期以後についても一定の間隔に区切り各段階の変化を分析・検討することが望ましいが、今回はそのように実施することができなかった。そこで概括的な傾向を知るための補助資料として、京都市内の一小学校の低学年児童の母親から任意抽出した対象について調査した。本研究の調査対象の詳細は第2表に示される。

調査の手続き 全項目に完全に記入してあるものだけ採用し、その中から標本として各段階毎に男子100部、女子100部ずつ抽出した。なお抽出の際に各学校から万遍に抽出した代表的標本とするため、学校毎の標本抽出数は比例配分した。母親については対象選定時にすでに任意抽出しているの有効な資料をすべて標本とした。

O-Score の正規性は、統計的に保証されている。

IV 結果と考察

1. 各段階毎にみた女性の役割観の様相

まず O-S score に表われた各時期の女性の役割観を概観してみよう。

第3表は中学生の O-S score の資料である。男子中学生では O-S score は、Form II が-1.70 で III I と順に少し自己指向へよるが 3 Form 間に有意差はみられず、O-S score のちらばりは大きくない。しか

第3表 中学生男女の O-S score 結果

FORM	男 子			t 検定結果	女 子		
	平均値	S D	レンジ		平均値	S D	レンジ
I	-2.06	6.39	19~-22		-3.05	11.42	23~-36
II	-1.70	7.79	25~-21		-2.34	10.99	24~-39
III	-2.18	7.11	11~-22		2.51	10.05	28~-32

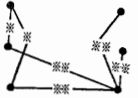
** P<0.01

は大きい。しかも、各 From 間に有意に高い相関が見出されたことなどから、役割観の現実と理想との分化の兆候が窺える程度にすぎない。一方、女子中学生では Form I, II が自己指向的役割観を示すのに対し、III は2.51と他者指向的であり、I, II の相関が .71 と非常に高いのに対し、平均値の差はほとんどない。II・III, III・I では相関が I・II より低く、平均値間には有意差が認められる。これらの結果は、女子では現実の役割観と理想とはほとんど分化していないが、異性の役割観は他のものと明確に分離されていることを示すものである。男女間では Form III に有意差があり、その上男子の Form II と女子の Form III の間にも差がある。これらの事実から、中学生では、女子の方が男子より女性の役割観の形成が進んでいるが、男女ともまだ現実と理想との明らかな分化ができるまでには達していない。しかし、女子が男子の理想像を他者指向的とみなす傾向が明らかに示されていることは注目に価いする。

次に高校生について見てみよう。第4表に示されるように、男子では Form III が-3.48と少し自己指向的で II, I と順に自己指向的傾向が強くなる。しかも Form II と III は O-S score に有意差がなく相関は.59と高いのに対し、I と II, I と III の間の O-S score は有意差があり、相関も .69, .65と高い。これらの事実から、I と II, III との区別はされているが、Form II と

III はあまり区別されてい
ないといえる。つまり、男子は女性の現実の役割と理想的役割とははっきり区別しているが、自己の理想と

第4表 高校生男女の O-S score 結果

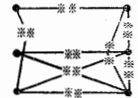
FORM	男 子			t 検定結果	女 子		
	平均値	S D	レンジ		平均値	S D	レンジ
I	-5.99	10.84	28~-45		-4.33	12.55	24~-33
II	-4.23	11.25	27~-45		-3.94	13.60	27~-42
III	-3.48	12.62	35~-40		4.10	13.23	34~-33

* P<0.05 ** p<0.01

異性のもつ理想の予測とは分離されていない。女子高校生では、Form I, II の平均値はほとんど差がなく、相関は .85 と高いが、Form III と I, II の間には平均値に有意な差があり、相関は .54, .42 で有意だが前者ほど高くない。この結果から、女子は自己の現実と理想の役割観にほとんど分化がみられないが、自己の役割観と異性の理想女性観とは別のものとして分けて考えているといえる。

大学生の結果は男女ともに以前の研究結果³⁰ とほぼ同じである (第5表)。すなわち、男子大学生は Form I では他

第5表 大学生男女の O-S score 結果

FORM	男 子			t 検定結果	女 子		
	平均値	S D	レンジ		平均値	S D	レンジ
I	3.11	12.53	26~-35		-5.59	14.19	41~-42
II	-0.41	13.93	35~-32		-9.12	15.03	33~-47
III	-2.43	13.94	40~-29		10.01	15.14	50~-24

**P<0.01

者指向的であり、Form II は -0.43 とほぼ自己指向と他者指向の中間に位置づけるが、Form III は自己指向的である。各 Form 間にはすべて有意に高い相関があるが、Form I II の間には他に比べて低く、平均値は I III の間のみに有意差がみられる。これらから、男子は役割観の3側面をはっきり区別しているが、中でも自分のもつ現実像と予測した女性の理想像とは、かなり明確に区別していることがわかる。女子大学生では、Form I, II が自己指向的であるのに対して、III は極端に他者指向的であり、相関は Form I II では .80 と非常に高いが、Form III と他の2つの Form との間は低い。平均値を比較すると、II, III の間には大きな差があり、I III, I II と順に差が小さくなる。これらの結果から、女子は自分の理想と予測した男子の理想とを極端なまでに切り離して考えるが、自己の現実と理想の役割観とは互いに関連させながら考えることを示している。男女には第5表に示したように、すべての平均値の組合せに有意差が見られ、男女ともに女性の役割観について個々の面を分化しながら、全体的に統合するような方向にむかっている。しかし、そのとらえ方には性差をはっきり認められることがわかった。

既婚の女性についての結果が第6表に示されている。家庭婦人のもつ現実の女性の役割観は 1.14 と少し他者指向的

第6表 家庭婦人 O-S score 結果

FORM	平均値	S D	レンジ
I	1.14	11.55	23~-33
II	-4.30	13.84	26~-43
III	7.68	8.39	36~-15

30 稲垣知子 前出論文 (1965) 参照。

であるのに対し、理想としては自己指向的な役割観を示し、また男性の理想女性観を非常に他者指向的であると予測している。また相関は I, II が、他の組合せより高く、平均値の差は他より少ない。これらから、既婚の女性は自己の役割観の現実と理想とはかなり密接に関連して考えるが予測した男性の理想像は自己の役割観と分けて考えているといえる。

2. 青年期における女性の役割観の変容

以上、各段階毎の様相を概観してきたが、それらの結果を一つの過程として見ると、どのような変化をしていることになるだろうか。

まず、男子中学生では、現実の女性の役割観と理想との分化の兆しが見られる程度で、まだ女性観はあまり形成されていず、特に女子のもつ理想像の予測はほとんどできない。女子中学生は、男子に比べて、かなりの分化を示し、中でも男子の理想女性像を他者指向的と予測し、From I, II と分けて考える傾向がはっきり認められる。

高校生になると、中学生で見られた傾向が明確になる。男子では3側面とも中学生より自己指向的になり、特に From I は統計的に有意に自己指向的となる。つまり、中学男子でその兆しが見られた自己の女性観の現実と理想との分化がかなり明らかになってきたものと思われる。高校女子でも、中学生の傾向が極端になることは男子と同じであるが、自己の役割観の現実と理想との分化は不完全である。

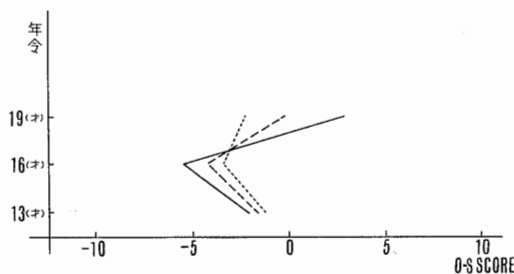
大学生の段階になると、女性の役割観の3アスペクトをはっきり区別して認知しうようになる。男子大学生では特に Form III がはっきり分化されていることが、前段階までにみられなかった現象である。現実でも理想でも前期までと明らかな相違が見られる。しかも、役割観を全体的な見通しを持ち、より一般的に判断するようになったことなど、高校から大学の間に女性観はかなりの程度にまで発達することが判明した。一方、女子大学生では、役割観の3面とも中学・高校と形成されてきた傾向がより極端になっていく。特に自己の役割観と予測した男子の理想女性観とは極端に区別して考えるようになる。現実と理想の自己の役割観を切り離すようになったことは、前段階までに見られなかった変化である。また男女の女性の役割観に差が生じることも前段階までは見られなかったこの期の特徴である。もう一つの特徴として、中学・高校までは男女とも現実の役割観の方が理想より自己指向的であったのに対し、大学生では理想の方が現実より自己指向的になることが指摘しうる。

家庭婦人になると、女子大学生とは全く異なった様相を示す。すなわち、現実および理想の役割観は大学生より有意に他者指向的の方へより、男子の理想女性観の予測は自己指向的方向による傾向が認められる。

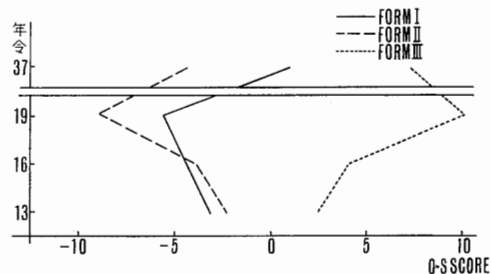
以上の女性の役割観の変容を図式的に表わしたものが第1図と第2図である。これらの図から3つの顕著な事実を指摘することができる。まず第1に、女子の From III が他と全く異なる

37) 概略については、第31回日本心理学会において発表したものである。

第1図 男子の O-S score の年齢による変化



第2図 女子の O-S score による変化



変化の様相を示すことが目につく。男子のそれとも女子の他の 2 Form と異なり、女子の Form III は極端に他者指向的である。筆者は前論文³⁸⁾でこの女子の男子についての誤った認知の傾向は男女間の意志伝達の欠如により生ずるのではないかと推測したが、もっと重大な歴史的社会的要因により根深く作り上げられているものと考えの方が妥当であると考えられる。

次に、全体的に男女の役割観の変化を見る時、すべての曲線が「く」の字形の線を描き、しかも男子では高校に頂点があるのに対し、女子では大学生に頂点があり、男女では役割観の変容にずれがあり、女子の方が遅いことをあげることができる。また加藤³⁹⁾の明らかにした自己意識の発達傾向に比べて、役割観の発達はかなり遅れて形成されることも判明した。何故、これらの結果が生じたのか、どのような要因によるかは現段階では定かでないが、以下のことは推測しうる。つまり役割観が単に自己意識であるだけでなく、背後に社会、文化、歴史からの影響を受けた生活についての意識から成り、その形成には自己意識だけより多くの要因の相互作用が必要とされる。そのためにずれが生じるのではないであろうか。また男女では現実社会への心的距離が違い、女子の方がより大きいと思われる。そのため男子より女子の方が遅れるのではないかと考えられる。

第三の特徴は、男子ではまず自己の女性観の現実と理想とが分離するのに対し、女子では自己の役割観と予測した男子の理想女性観とがまず区別されだすという相違である。これは現在までの青年心理の研究でいわれている男女の関心領域の相違を反映しているのではないと考えられる。

3. 内容的に見た女性の役割観の変化

前節まで女性の役割観の全体的な変容を検討してきたが、当然その内容にも変容が見られるものと思われる。そこで、特に女子について、役割観の内容の変容を分析してみることにする。以下の分析は、 χ^2 検定により各年齢間における Form I, II, III の調査項目の評定点の分布の差を比較した結果である。

まず全体的に見ると、Form I では大学生と母親との差がもっとも多く、高校生・大学生間が一番少ない。Form II では、中学生と高校生の間が少ないのを除いて、高校生・大学生間、大学

38) 稲垣知子 (1965) 前出論文参照。

39) 加藤隆勝 (1964) 青年期——その心理と思想——誠信書房。

生と家庭婦人の間と同じ程度に多くの変化がみられ、また Form III においては、高校生・大学生間がもっとも多く、大学生・家庭婦人間がもっとも少ない。これらの事実から、現実の自己の役割観の内容は、大学生と母親の間で著しく変化するが、理想については、高校時代から母親に至るまで同じように大きく変っていく。これに対し Form III は、高校から大学の間に急激に変化し、男子の認知の形はほとんど出来上ってしまうといえる。

次に具体的な内容の変化について検討してみよう。

現実の女性の役割観について、中学生と高校生とを比べると、主に家庭内での母親の役割に違いがあり、中学生が「女は家にいて夫を助けて、夫の成功に満足し、子供をりっぱに育てるよう」に努めるべきだ」という内容の項目に高校生より高い評定を与えるのに対し、高校生になると「例え結婚しても妻は夫と同等であり、能力のある人は家庭外に仕事をもつべきだ」というよう

に変ってくる。高校から大学にかけては差も少なく一貫した傾向は見られなくなるが、わずかに大学生は家庭のあり方と他人とのつき合いについて高校生より自己指向的な考え方をするようになる。

理想とする女性の役割観では、中学生と高校生の間に現実面より多くの項目に差があるが、その傾向はほとんど同じである。ただ現実面には見られなかった傾向として、高校生に単に母親の態度に関する項目に自己指向的傾向が強くなると同時に、自分の結婚について「例え少々自分の理想とは違っても結婚するほうがいい」という考えが新たに生じている。高校から大学にかけては著しい差異が生じる。すなわち、高校生の段階で生じた結婚への希望が、大学生になると「他人のことなどあまり気にせず自分の能力をのばし積極的に仕事をしていきたい。もし、自分の主張をまげなければいけないなら、結婚しない方がいい」というよう

に変ってくる。これが家庭婦人になると再度大きく変り「もし能力があるなら、仕事を持ち働くのはよいが、同時に女は結婚し夫に仕え子供を育てるべきである。仕事と結婚とは両立さすべきだ」という考えになる。

男子の理想女性観を予測する場合、高校生が「男の人は妻が家にいて夫に従うのを望む」という内容の項目にわずかに中学生より明確な考えが示されるが、その差異はあまりない。大学生になると、「男子はひかえ目な態度の女性を理想とし、男性優位を望むであろう」と考えるようになり、男子認知の形ははっきり作り上げられている。これが結婚し育児をするようになると、「男子は女が夫や子供のことをまず考えるのが望ましいが、他面女が世の中に認められるような仕事をして自分の発展を計ることを理想とする」と評価するようになる。

以上の結果から、女性の役割観の内容の年齢による変化について要約してみよう。

中学生は役割観の現実でも理想でも家庭における母親の態度をそのまま認めているのに対し、高校生は家庭での妻、母親のあり方に批判的になる一方、結婚ということについて理想的に夢

するようになる。大学生は現実面では高校時代に形成された傾向が極端になるが、特に一つの面の急激な変化はみられないのに比べ、理想については大きく変わり、結婚に批判的になり、自身自身の能力の進展への要求が強くなる。また前段階まではみられなかった男子の理想女性像についての認知の形が明瞭になる。これらは、結婚し家事育児を実際にする主婦になると、現実、理想とも家庭の妻として母親としての態度についても考え方が大学生より他者指向的になり、一方男子の理想女性像については自己指向的な女性を予測するようになる。

V 結 論

前章までの結果から、以下の如く結論しうる。

1. 女性の役割観の発生は女子の方が早いですが、その形成過程は男子の方が女子より早く進行する。しかも異性のもつ理想的な女性観の予測についての変容は男女間に大きな差異がある。
2. 青年期において、女性の役割観の現実と理想との差異は、発達とともに大きくなる。これは役割観が自己意識の発達と社会化、身体的発達などの相互作用を受けて形成されるために生じるものと思われる。現段階ではこの差異が不適応の指標とは断定しえない。
3. 女性の役割観は、現実社会との直接的接触の中で生活するようになると大きく変換するといえる。今まで Komarovsky⁴⁰ 以来の諸研究で共通していられていた「二つの極端に矛盾した女性の役割観の存在」は、被験者の年齢段階によって規定され誇張されて表われた現象であるといえる。

VI 本研究に残された問題

1. 本研究では、中期および後期の対象として学生のみしか取り扱っていない。しかし、実社会ですでに働いている同年齢のものは学生とは異なる役割観の様相を示すのではないかと推測される。そこで対象を拡大していくことが要求される。同時に、年齢段階の細分化も必要であると思われる。
2. 横断的方法と同じ手続きによって、数量的に役割観変容への縦断的アプローチをしなければ、他のいかなる方法でも決して補いえない欠点が残っている。
3. 分析の視点として、生活の背景との関連があげうる。特に自己意識の発達、社会化などの内的なものと同時に、家庭環境、父母の諸条件などの外的要因との関連をも併せ検討してみる必要があるといえる。

また、質的变化についての分析には役割観の因子構造の比較をしてみることが一つの有効なアプローチであるといえる。

VII 要 約

40) Komarovsky, M. 1946. 前出。

本研究の目的は、女性の役割観の発達の変容について、青年期を中心に分析・検討することである。そのために青年期を横断的に3期に区切り、各期の代表的集団として、中学2年生380（男128，女252）、高校2年生339（男185，女154）、大学生519（男228，女291）、および補足的に家庭婦人120を選定し、対象とした。調査用紙として Fand の Feminine Role Rating Inventory の日本語改訂版を用いた。用紙の信頼性と妥当性は統計的に保証されている。結果については男女各100名ずつ年齢毎に抽出した標本を検討した。

結果として以下のことが明らかになった。

女子では中学生ですでに役割観の分化がはじまり、高校生になるとその傾向が極端になるが、中学・高校生ではまだ自己の役割観の現実と理想との分化はあまり明確ではない。大学生になると、役割観の傾向は高校生よりも極端になる。また女子の役割観の形成過程で、大学生と家庭婦人との間に変換点があり、母親になると、高校生、大学生と極端になっていた傾向が緩和される。また男子のもつ理想的な女性観を他の自己の役割観と分離して考える傾向は、中学生ですでに形成されているものである。役割観の内容にも発達的な変化がみられた。これらの結果から、従来の研究でいわれている「二つの矛盾した女性の役割の存在」は被験者が大学生であったために誇張された現象であるといえる。

男子のもつ女性の役割観について検討した結果、中学生ではまだ発達の兆しが窺える程度であるが、高校生になると、特に現実と理想との分化があらわれ発達する。しかし、その傾向は、高校生と大学生との間で変換し、大学生では各側面が明確に分化し、しかも統合するような方向へむかうことが判った。

男女の女性の役割観の変化にはずれがあるといえる。

役割観発達をとらえようとした本研究には、方法論的に多くの残された問題がある。